

年間第25主日福音メッセージ
マルコ 9:30-37
全ての人に仕えるものになりなさい

壮大なことを望むことは良いことです。神は人間の心の中に偉大さへの願望を置いておられます。しかし悲劇的なことに、人間はあまりにも小さな欲望を抱くことが多いのです。ヘブライ語で罪を意味する言葉は、「的外れ」という意味です。私たちは的を外し続け、神の栄光は草を食む雄牛と交換しています（詩篇 106:20-21）。つまり、罪を犯すことで、神の外に幸福の偽りの約束を求めるのです。私たちは被造物を偶像に変え、神に導くはずだったものが私たちの気を散らしてしまうのです。アダムの罪は、神のようになりたいと思ったことではありません。それは確かに彼の天職であった。彼の過ちは、独立した自律的な神のイメージを誤って解釈したことであり、この誤ったイメージを模倣することによって、彼は自らを不従順にしたのである。アダムは孤独に引きこもったのに対し、神は三位一体の共同体としてご自身を啓示されました。使徒たちは会話の中でアダムのように考えていました。彼らは他者の上に自己を肯定することで壮大さを求めていたのです。

「もし誰かが最初になりたいと思うなら、その人はすべての人の最後であり、すべての人のしもべでなければならぬ」。イエス様は、使徒たちの間違った誇大感を優しく、しかししっかりと正してくださいました。三位一体の中で、神は他者に喜びを見出す自己犠牲の愛の共同体です。イエスは公の生活の中で、使徒たちに何度もこのモデルを示しました。飢えた人を食べさせ、病気を治し、悪霊を追い出し、人々を教えた。

「人の子は、仕えられるために来たのではなく、仕えるために来たのである」（マタイ 20:28）。ですから、使徒たちは恵みの助けを借りて、父に従うこと、人に仕えることというキリストの心を身につけるために働かなければなりません。すべてのクリスチャンは、利己主義から無私の愛への同じ旅をしなければなりません。

"人の子は人に引き渡されて殺され、その死の三日後によみがえります。" 私たちの主の受難と死は、彼の自己犠牲の頂点でした。この愛と犠牲のつながりを、使徒たちはなかなか理解できませんでした。例えば、ヤコブとヨハネが「御国で右と左に座らせてください」と言った時（マルコ 10:35）などです。墮落した人間にとって、この自己犠牲の愛の教えがあまりにも直観的であったからこそ、主は私たちの贖罪の手段として十字架を選ばれたのでしょ。主は、自分の人生と死を通して、この教訓を伝えたかったのです。やがて使徒たちは、聖霊の助けを得て、主の道をたどり、殉教者としての死を覚悟しました。

ウィル神父